

6/30

切り株にうさぎが激突、味をしめた百姓の哀れな末路の物語は、説話「守株待兔」(しゅしゅたいと)として、中国の思想書「韓非子」(かんぴし)に記述されているそうです。

『待ちぼうけ』

北原白秋 山田耕作

待ちぼうけ 待ちぼうけ  
ある日せつせと 野良稼ぎ  
そこに兔がとんで出て  
ころりころげた 木のねっこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ  
しめた これから寝て待とうか  
待てば獲物が駆けてくる  
兔ぶつかれ、木のねっこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ  
昨日鍬取り 畑仕事  
今日は頬づゑ 日向ぼこ  
うまい切り株 木のねっこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ  
今日は今日ではで 待ちぼうけ  
明日は明日ではで 森のそと  
兔待ち待ち 木のねっこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ  
もとは涼しい黍畑  
いまは荒野のほうき草  
寒い北風 木のねっこ

6/29

「うさぎ」の登場する歌をもうひとつ、「うさぎとかめ」。ルーツはイソップ童話で、西欧との貿易が盛んになった室町時代後期以降に流入し、伊曾保物語として近世以降に知られ始め、明治になって初等科の国語の教科書に採録されてから一般に流布したよ

うです。教科書では「油断大敵」というタイトルで掲載されていました。

『うさぎとかめ』

作詞：石原和三郎 作曲：納所弁次郎

「幼年唱歌 二編上巻 明治 34 年(1901)」所収

「もしもし かめよ かめさんよ  
せかいのうちに おまえほど  
あゆみの のろい ものはない  
どうして そんなに のろいのか」

「なんと おっしゃる うさぎさん  
そんなら おまえと かけくらべ  
むこうの 小山(こやま)の ふもとまで  
どちらが さきに かけつくか」

「どんなに かめが いそいでも  
どうせ ばんまで かかるだろう  
こころで ちょっと ひとねむり」  
ゲーゲーゲーゲー ゲーゲーゲー

「これは ねすぎた しくじった」  
ピョンピョンピョンピョン  
ピョンピョンピョン  
「あんまり おそい うさぎさん  
さっきの じまんは どうしたの」

兎のダンスで「うさぎ」が出てきました。うさぎを素材とした歌は多くあるようですが、先ず思い浮かんだのは「ふるさと」。「うさぎ追いしかの山。。。』ですが、既に出ましたので、次はちょっと古いところで：

『うさぎ』

作詞者・作曲者不詳、明治 25 年(1892)『小学唱歌 (二)』所収

うさぎ うさぎ なに見てはねる  
十五夜お月さま 見てはねる

なお、「今は昔、天竺に兎・狐・猿、三(みつ)の獣ありて、共に誠の心を発(おこ)して菩薩の道(どう)を行ひけり」で始まる仏教説話があり、困っている老人に、狐、猿はそれぞれ探してきたものを差し出しましたが、兎は散々探したものの老人の喜びそうなものを見つけられず、自ら火に飛び込んで、私の肉をお食べ下さいと差し出したという話があり、兎には「献身」というイメージもあるようです。

6/27

野口・中山コンビの歌をもうひとつ。大正 13 年(1924)、児童雑誌「コドモノクニ」に発表された童謡。

『兎のダンス(うさぎのだんす)』

作詞: 野口雨情 作曲: 中山晋平

ソソラ ソラ ソラ うさぎのダンス  
タラッタ ラッタ ラッタ  
ラッタ ラッタ ラッタラ  
あしで 蹴り 蹴り  
ピョッコ ピョッコ 踊る  
耳にはちまき  
ラッタ ラッタ ラッタラ

ソソラ ソラ ソラ 可愛いダンス  
タラッタ ラッタ ラッタ  
ラッタ ラッタ ラッタラ  
とんで 跳ね 跳ね  
ピョッコ ピョッコ 踊る  
あしに赤靴  
ラッタ ラッタ ラッタラ

6/26

野口雨情・中山晋平のコンビの懐かしい歌はほかにもいくつかありました。『証城寺の狸囃子(しょうじょうじのたぬきばやし)』は、野口雨情が千葉県木更津市を訪れた際に聞いた證誠寺の狸囃子伝説を元に作詞したものだそうです。

『証城寺の狸囃子』

作詞:野口雨情 作曲:中山晋平

証 証 証城寺  
証城寺の庭は  
つ つ 月夜だ  
みんな出て 来い来い来い  
おいらの友だちゃ  
ぽんぽこ ぽんの ぽん

負けるな 負けるな  
和尚(おしょう)さんに 負けるな  
来い 来い 来い  
来い 来い 来い  
みんな出て 来い来い来い

証 証 証城寺  
証城寺の萩(はぎ)は  
つ つ 月夜に 花盛り  
おいらは浮かれて  
ぽんぽこ ぽんの ぽん

6/24

確かに福岡さんがおっしゃるように「ちょうちょう」は菜の「葉」に止まるんですね。ウィキペディアを見たら 2 番まで載っていて、雀だったので驚きました。原曲はドイツ語のようで、米国を経て留学生(伊沢修二)によって日本にもたらされた、とありました。

『ちょうちょう』(小学唱歌)

明治 14 年(1881)

蝶々 蝶々 菜の葉に止れ  
菜の葉に飽たら 桜に遊べ  
桜の花の 栄ゆる御代に

止れや遊べ 遊べや止れ

おきよ おきよ ねぐらの雀  
朝日の光の さきこぬさきに  
ねぐらをいでて 梢にとまり  
あそべよ雀 うたへよ雀

1947 年以降の歌詞

ちょうちょう ちょうちょう  
菜の葉にとまれ  
菜の葉にあいたら 桜にとまれ  
桜の花の 花から花へ  
とまれよ遊べ 遊べよとまれ

ドイツ語 (原曲とされる)

Hänschen klein geht allein  
In die weite Welt hinein.  
Stock und Hut steht ihm gut,  
Ist gar wohlgemut.  
Doch die Mutter weinet sehr,  
hat ja nun kein Hänschen mehr.  
"Wünsch dir Glück",  
sagt ihr Blick,  
"kehr' nur bald zurück"

英語 (訳詞: 小林愛雄)

Lightly row! lightly row!  
O'er the glassy waves we go;  
Smoothly glide! smoothly glide!  
On the silent tide,  
Let the winds and waters be  
mingled with our melody,  
Sing and float! sing and float!  
In our little boat.

軽(かろ)く 漕げや  
しづかな波に  
軽く すべれ  
この潮に  
寄せ来る波と  
吹き来る風と  
共に 歌へ  
この船に

6/24

毎朝のように、ラゾーナ川崎の 2 階入り口から、来年 3 月完成予定の川崎駅北口の工事の進捗状況を眺め、写真を撮っています。昨日の朝もそこを通ると、一匹のアゲハチョウが植えてある木の花の蜜を吸いながら飛び回っていて、思わずシャッターを切りました。アゲハなんです、浮かんだ歌は「もんしろちょうちよの郵便屋さん」:

『もんしろ蝶々のゆうびん屋さん』

サトウ ハチロー作詞・中田喜直作曲／昭和 28 年

もんしろ蝶々の ゆうびん屋さん  
朝から配達 朝から配達  
あねもね横町 十番地  
角から二軒目 ハイ ゆうびん

もんしろ蝶々の ゆうびん屋さん  
せっせと配達 せっせと配達  
ひなげし通りの 六番地  
まっかな看板 ハイ ゆうびん

もんしろ蝶々の ゆうびん屋さん  
あちこち配達 あちこち配達  
チュウリップ奥さん ハンコです  
うれしい書留 ハイ ゆうびん

6/21

写真のトンボのやじろべえは  
行田市観光課で販売しているものです。  
手作りで羽の模様があり、背中には忍城(おし  
じょう)の(城主・成田家の)家紋がついて  
います。受験生に人気のお守りだそうで、  
大学の同僚の先生が購入されて、オフィスの  
棚に飾ってあります。

最初にこれを見たときはちょっと不思議に思いました。ふつう、やじろべえは、支点よ  
りも重心をかなり低くして安定を保っていますが、このやじろべえは重心がかなり高く  
なっています。

試しに羽や尻尾を触ってみましたか、とても安定で簡単には落ちません。やっぱり不  
思議な感じですよ。

ここに作り方が書いてありました:

[www.gctv.ne.jp](http://www.gctv.ne.jp) › takekougei › hanakago

とんぼといえば:

『とんぼのめがね』

作詞: 額賀 誠志 作曲: 平井康三郎

とんぼのめがねは みずいろめがね  
あおいおそらを とんだから  
とんだから

とんぼのめがねは ぴかぴかめがね  
おてんとさまを みてたから  
みてたから

とんぼのめがねは あかいろめがね  
ゆうやけぐもを とんだから  
とんだから

6/19

川崎駅に北口改札が出来ました。ホームへの入口だけなので特に便利になる訳では

ありませんが、朝の混雑の解消には多少役立ちそうです。現在、ラゾーナ川崎と北口を結ぶ工事が来年3月の開通を目指して続けられており、完成しますと、外から北口に入れるようになり、便利になりそうです。新しいショッピングモールもできるようなのでどんな店が入るのか、これも楽しみです。

さてもう一つ、汽車の歌でよく知られているのは昭和2年(1927)、本居長世作詞作曲の「汽車ぽっぽ」です。スピード感があって楽しい歌です：

(なお、一昨日投稿しました富原薫作詞の「汽車ポッポ」は、投稿後知りましたが、元歌は昭和14年(1939)に作詞された『兵隊さんの汽車』でした。これは大ヒットしたそうですが、戦時色の強い歌詞は戦後改められ、『汽車ポッポ』として現在まで歌い継がれているということです。)

### 『汽車ぽっぽ』

作詞・作曲：本居長世

お山の中行(ゆ)く 汽車ぽっぽ  
ぽっぽ ぽっぽ 黒い煙(けむ)を出し  
しゅしゅしゅしゅ 白い湯気ふいて  
機関車と機関車が 前引き 後(あと)押し  
なんだ坂 こんな坂  
なんだ坂 こんな坂  
トンネル鉄橋 ぽっぽ ぽっぽ  
トンネル鉄橋 しゅしゅしゅしゅ  
トンネル鉄橋 トンネル鉄橋  
トンネル トンネル  
トン トン トンと のぼり行く

6/18

明治5年9月12日(1872年10月14日)、新橋-横浜間に日本で初めての鉄道が開通しました。機関車の機関士は外国人、運行ダイヤの作成者はイギリス人で、これらの外国人技術者は「お雇い外国人」と呼ばれ、高給取りでした。鉄道員は士族が多かったそうです。紆余曲折を経て東海道線全線が開通したのは明治22年(1889)7月1日でした。ほぼ同時に、大船-横須賀間の横須賀線が開通しています。私的な注ですが、山陽線開通は明治27年(1894年)、祖父は明治29年に呉仮設兵器製造所



(後の海軍工廠)主幹として呉に赴任し、明治 36 年(1903 年)に同地で父(三男)が生まれました。この年に呉と山陽線海田市(かいたいち)間の鉄道が開通しています。

ところで、明治 32 年(1899)に発表された『鉄道唱歌』は第 6 集(374 番)まであり、第 1 集「鉄道唱歌(東海道篇)」は 66 番まで。はじめの 16 番までを載せました。

『鉄道唱歌』(の一部)

大和田建樹作詞・多梅稚(おおのうめわか)作曲

一 汽笛一声(いっせい)新橋を  
はや我(わが)汽車は離れたり  
愛宕(あたご)の山に入りのこる  
月を旅路の友として  
(新橋)

二 右は高輪(たかなわ)泉岳寺  
四十七士の墓どころ  
雪は消えても消えのこる  
名は千載(せんざい)の後(のち)までも

三 窓より近く品川の  
台場も見えて波白く  
海のあなたにうすがすむ  
山は上総(かずさ)か房州か  
(品川)

四 梅に名をえし大森を  
すぐれば早も川崎の  
大師河原(だいしがわら)は程ちかし  
急げや電気の道すぐ  
(大森)(川崎)

五 鶴見神奈川あとにして  
ゆけば横浜ステーション  
湊を見れば百舟(ももふね)の  
煙は空をこがすまで(鶴見)(神奈川)

(横浜)(保ヶ谷)(戸塚)

六 横須賀ゆきは乗換と  
呼ばれておる大船の  
つぎは鎌倉鶴ヶ岡  
源氏の古跡(こせき)や尋ね見ん  
(大船)(鎌倉)

七 八幡宮(はちまんぐう)の石段に  
立てる一木(ひとき)の大鴨脚樹(おおいちょう)  
別当公暁(くぎょう)のかくれしと  
歴史にあるは此蔭(このかげ)よ  
(2010年3月10日強風により倒壊、樹齢1,000年を超えていた。)

八 ここに開きし頼朝(よりとも)が  
幕府のあとは何かたぞ  
松風さむく日は暮れて  
こたえぬ石碑は苔あおし

九 北は円覚建長寺  
南は大仏星月夜  
片瀬腰越(こしごえ)江の島も  
ただ半日の道ぞかし

十 汽車より逗子(ずし)をながめつつ  
はや横須賀に着きにけり  
見よやドックに集まりし  
わが軍艦の壮大を  
(逗子)(横須賀)

十一 支線をあとに立ちかえり  
わたる相模(さがみ)の馬入川(ばにゅうがわ)  
海水浴に名を得たる  
大磯みえて波すすし  
(藤沢)(茅ヶ崎)(平塚)(大磯)

十二 国府津(こうづ)おるれば馬車ありて  
酒匂(さかわ)小田原とおからず  
箱根八里の山道も  
あれ見よ雲の間より  
(国府津)(松田)

十三 いでてはくぐるトンネルの  
前後は山北小山(やまきたおやま)駅  
今もわすれぬ鉄橋の  
下ゆく水のおもしろさ  
(山北)(小山)

十四 はるかにみえし富士の嶺(ね)は  
はや我そばに来(きた)りたり  
雪の冠(かんむり)雲の帯  
いつもけだかき姿にて  
(御殿場)(佐野)

十五 ここぞ御殿場(ごてんば)夏ならば  
われも登山をこころみん  
高さは一万数千尺(すせんじゃく)  
十三州もただ一目(ひとめ)

十六 三島は近年ひらけたる  
豆相(ずそう)線路のわかれみち  
駅には此地(このち)の名をえたる  
官幣大社(かんぺいたいしゃ)の宮居(みやい)あり

(以下続く)

6/16

もう一つ汽車の歌を:

『汽車ポッポ』

富原薫作詞・草川信作曲

汽車(きしゃ) 汽車 ポツポ ポツポ  
シュッポ シュッポ シュッポツポ  
僕等(ぼくら)をのせて  
シュッポ シュッポ シュッポツポ  
スピード スピード 窓(まど)の外  
畑(はたけ)も とぶ とぶ 家もとぶ  
走れ 走れ 走れ  
鉄橋(てつきょう)だ 鉄橋だ たのしいな

汽車 汽車 ポツポ ポツポ  
シュッポ シュッポ シュッポツポ  
汽笛(きてき)をならし  
シュッポ シュッポ シュッポツポ  
ゆかいだ ゆかいだ いいながめ  
野原だ 林だ ほら 山だ  
走れ 走れ 走れ  
トンネルだ トンネルだ うれしいな

汽車 汽車 ポツポ ポツポ  
シュッポ シュッポ シュッポツポ  
けむりをはいて  
シュッポ シュッポ シュッポツポ  
ゆこうよ ゆこうよ どこまでも  
明るい 希望が 待っている  
走れ 走れ 走れ  
がんばって がんばって 走れよ

6/16

子供は電車が大好きです。走り去って行く電車を見ると「バイバイ」。電車の歌もあるのですが、懐かしの歌は「汽車」:

『汽車』

作詞: 大和田 愛羅 作曲: 大和田 愛羅?(諸説あり)

今は山中 今は浜  
今は鉄橋渡るぞと  
思う間も無くトンネルの  
闇を通過して広野原(ひろのはら)

遠くに見える村の屋根  
近くに見える町の軒(のき)  
森や林や田や畑  
後へ後へと飛んで行く

廻り灯籠の画(え)の様に  
変わる景色のおもしろさ  
見とれてそれと知らぬ間に  
早くも過ぎる幾十里

6/14

梅雨に入りました。ここ 1 週間、晴れそうもありません。てるてる坊主。3番はちょっとこわいので歌わないのではないのでしょうか。

『てるてる坊主』

作詞: 浅原鏡村 作曲: 中山晋平

(1番)

てるてる坊主 てる坊主  
あした天気にしておくれ  
いつかの夢の空のよに  
晴れたら金の鈴あげよ

(2番)

てるてる坊主 てる坊主  
あした天気にしておくれ  
わたしの願いを聞いたなら  
あまいお酒をたんと飲ましょ

(3番)

てるてる坊主 てる坊主  
あした天気にしておくれ  
それでも曇って泣いてたら  
そなたの首をチョンと切るぞ

6/12

母は生前によく「大正時代(母はまだ幼年から 10 代でしたが)はとても平和で、思い出はみんな楽しいことばかり。」と話していました。その大正時代に何でこんなもの悲しい歌が大流行したのか、不思議な気がします、その歌をなぜ自分が覚えているか、と考えますと、親父が家でよく自作の大正ギターやシンプラー(写真)を使って弾き歌いをしていたからだと思われます。

大正 10 年(1921 年)に民謡「枯れすすき」として野口雨情が作詞し、中山晋平が作曲(前回の「シャボン玉」と同じコンビ)したものだそうですが、次の年に神田春盛堂から「枯れ芒」を改題し「船頭小唄」として掲載され、大流行しました。その年、大正 12 年(1923 年)に関東大震災が起こり、雨情の暗い歌詞、晋平の悲しいメロディーがさらに流行を誘ったのではないかとされています。さらに戦後、昭和 32 年(1957 年)映画『雨情物語』の主題歌として森繁久彌さんが歌い、「枯すすき」が人生の哀愁に共感するものとしてヒットして再び流行歌となったということです。

『枯れすすき(船頭小唄)』

作詞:野口雨情 作曲:中山晋平

俺は河原の 枯れすすき  
おなじお前も 枯れすすき  
どうせ二人は この世では  
花の咲かない 枯れすすき

死ぬも生きるも ねえお前  
水の流れに 何かわろ  
俺も お前も 利根川の  
船の船頭で 暮らそうよ

枯れた真菰に 照らしてる

潮来出島のお月さん  
わたしゃこれから 利根川の  
船の船頭で 暮らすのよ

なぜに冷たい 吹く風が  
枯れたすすきの 二人ゆえ  
熱い涙の 出たときは  
汲んでおくれよ お月さん

どうせ二人は この世では  
花の咲かない 枯れすすき  
水を枕に 利根川の  
船の船頭で 暮らそうよ

歌詞を見ていたら、奥の細道の冒頭を思い出しました。曰く、

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす云々。。。

6/10

金曜日の朝、勤務先(江田)の会社の近くの公園でシャボン玉を楽しむ母子の微笑ましい姿を見かけました。ちょうどそこに保育園児達が保育士に連れられてやってきて興味深い様子でした。シャボン玉、これも野口雨情作詞。

『シャボン玉』

作詞: 野口雨情 作曲: 中山晋平

シャボン玉飛んだ 屋根まで飛んだ  
屋根まで飛んで こわれて消えた  
風 風 吹くな シャボン玉飛ばそ

シャボン玉消えた 飛ばずに消えた  
生まれてすぐに こわれて消えた  
風 風 吹くな シャボン玉飛ばそ

6/8

将棋では藤井聡太四段が 23 連勝して歴代単独 3 位。これには驚きましたが、どれだけ連勝記録を伸ばすのか楽しみです。最近の棋士は皆さん PC に過去の棋譜を入れて研究されるようですが、最近引退された加藤一二三九段がパソコンを使わなかった最後の大家だったようです。自分が将棋を楽しんでいた中学のころ(50 年以上前になりますが)は、大山・升田の時代で、村田英雄さんの歌う「王将」が流行っていました。藤井四段や羽生 3 冠には全く似合いませんが:

### 『王将』

作詞:西條八十 作曲:船村徹

吹けば飛ぶよな 将棋の駒に  
賭けた命を 笑わば笑え  
うまれ浪花の 八百八橋  
月も知ってる 俺らの意気地

あの手この手の 思案を胸に  
やぶれ長屋で 今年も暮れた  
愚痴も言わずに 女房の小春  
つくる笑顔が いじらしい

明日は東京に 出て行くからは  
なにがなんでも 勝たねばならぬ  
空に灯がつく 通天閣に  
おれの闘志が また燃える

6/5

昨日朝 7 時のニュースの中で、昨年 7 月に亡くなった永六輔さんの足跡をお孫さんが辿るドキュメンタリーを放送していました。遺品の中に 10 万通を超えるファンとのやりとりのはがきや手紙があり、永さんが丹念にファンからのメッセージに返信を書かれていたことが伺われました。番組では随所に坂本九さんの歌う「見上げてごらん夜の星を」が流れていました。

### 『見上げてごらん夜の星を』



作詞:永六輔 作曲:いずみたく

見上げてごらん 夜の星を  
小さな星の 小さな光りが  
ささやかな幸せを うたってる

見上げてごらん 夜の星を  
ぼくらのように 名もない星が  
ささやかな幸せを 祈ってる

手をつなごう ぼくと  
追いかけて 夢を  
二人なら 苦しうなんかないさ

見上げてごらん 夜の星を  
小さな星の 小さな光りが  
ささやかな幸せを うたってる

見上げてごらん 夜の星を  
ぼくらのように 名もない星が  
ささやかな幸せを 祈ってる

6/2

美しいものは悲しい?あざみの歌:

『あざみの歌』

横井弘作詞・八洲秀章作曲

山には山の 愁(うれ)いあり  
海には海の 悲しみや  
ましてこころの 花ぞのに  
咲しあざみの 花ならば

高嶺(たかね)の百合の それよりも  
秘めたる夢を ひとすじに

くれない燃ゆる その姿  
あざみに深き わが想い

いとしき花よ 汝(な)はあざみ  
こころの花よ 汝はあざみ  
さだめの径(みち)は はてなくも  
香れよせめて わが胸に